

委託事業実施内容報告書

令和4年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【地域日本語教育実践プログラム】

実施内容報告書

団体名：学校法人 学習院

事業の概要

事業名称	主体的な学びを可能にする日本語学習環境作り ー共生社会における地域と大学の連携ー
日本語教育活動に関する特定のニーズの実情や課題	<p>豊島区は人口の8.54%が外国籍住民であり（24,200人、2022年1月1日現在）、都内でも特に外国人比率の高い地域である。しかし、「生活者としての外国人」を対象として開催される日本語教室（豊島区後援）は9教室のみであり、2023年3月時点でも、コロナ禍により休室状態のままのところもある。2020年に豊島区との協働で在住外国人を対象に実施したアンケート調査（文化審議会国語分科会「日本語教育に関する調査の共通利用項目」利用、有効回答者数1,179）によれば、あいさつ程度の日本語能力しか持たない住民、日本語を学びたいのに学んでいない住民が一定数存在する。学んでいない理由は、仕事が忙しい、方法がわからない、教室の場所・時間が合わない、などであった。また、その前年に実施した区内日本語教室に対する調査や「日本語ネットとしま」（2019年に発足した会議体）での情報交換を通じ、日本語未習者に対する指導・支援を行っていない、あるいは行うのが困難という教室が大半であることもわかっている。さらに、感染症がまん延する中で休むことなく学習機会を提供できたのは大学基盤の教室に限られていた。以上から、区人口に占める外国人の割合が高いにもかかわらず、基礎的な日本語を身に付けられる場が乏しく、結果として不十分な日本語能力のまま生活し続ける住民がいるということが示された。</p> <p>また、外国籍住民が区に期待することの1位は「外国人と日本人が交流する機会を作ること」（2020年調査、選択率38.25%）であった。これは、都会ならではの人と人とのつながりの希薄さ、人間関係づくりの難しさを表している。</p> <p>以上により、多文化共生社会を目指す上で、日本語学習に関する課題は次の2点であると考えた。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 日本語を学べる機会が質量共に不十分・不安定であり、特に、学び続けるための基礎を身に付ける場がないこと2. 人とつながる場面・機会が乏しく、在住外国人が日本語を社会の中で使い学ぶことが困難なこと <p>これらは地域を超えた共通課題である可能性が高く、本事業での取組は他地域の参考ともなると考えた。</p> <p>各取組を終えた現在、上述の課題についてはいずれも解決の方向に進んだが、「学び続けるための基礎を身に付ける場」は、今回の実践を踏まえ、開催回数・場所を増やしていく必要がある。また、「やさしい日本語」ワークショップの実施は「人とつながる場面・機会」を拡充する一助となり、今後も同様の取組は重要である。</p>
事業の目的	<p>社会状況に影響を受けることなく、外国人が社会の一員として主体的・協働的に日本語を学び続けることのできる学習環境の基盤をつくることを目的とする。そのために、2022年度は以下を目的として事業を進める。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 初歩レベルの学習者に対し、集中的な初期指導プログラムを設計・実施し、日本語の基礎の形成、日本語学習に対する動機・意欲の向上をはかる。2. 社会生活を営みながら日本語学習を自律的・自立的に行えるようになるプログラムを設計・実施する。3. 外国人と日本人が接する機会、交流する機会を充実させるべく、日本人の日本語調整能力を向上させる。 <p>1及び2においては、感染症のまん延などによって学びが途絶えることのないように、また、個別学習と協働学習それぞれの充実をはかるため、ICTを積極的に活用しその効果を探ると同時に、対面学習および対面コミュニケーションの意義も明らかにしていく。</p>

事業内容の概要 (課題をどのように解決したのか、どのような点が先進的な取組であったのか分かるように記載)	<p>1. 日本語教育の実施 「課題 1. 日本語を学べる機会が質量共に不十分・不安定であり、特に、学び続けるための基礎を身に付ける場がないこと」を解決するため、2種の教室を開設した。 (1) 初期集中日本語教育の実施：忙しい、学び方がわからない、意欲が保てない、といった原因・理由により、基礎的な日本語能力を身に付けることが困難な外国人に対し、集中的な日本語コース(週5日各3時間、2週)を提供した。個別と協働、オンラインと対面、それぞれの特長を生かした短期集中型コースの受講を通じ、基礎的な日本語を学ぶと同時に、日本語を学ぶ意欲、学びがいを高めた。 (2) 自立を目指す日本語教育の実施：日常的・定型的なやりとりはできるが、継続的・自律的な学習や日本人との交流が困難である外国人に対し、自己調整学習の理念・方法を取り入れたプログラムを提供した。個別学習と協働学習を組み合わせた、週1回全18回の活動への参加を通じ、生活に必要な日本語、社会参加に必要な日本語を学ぶと同時に、自律的に学ぶ力を身に付けることを目的とした。 (1)(2)いずれの教室についても、別途作成した教材(含. 動画)を使用し、機材がないために予復習のできない学習者にはタブレットを貸し出した。</p> <p>2. 専門家のための「やさしい日本語」研修 「課題 2. 人とつながる場面・機会が乏しく、在住外国人が日本語を社会の中で使い学ぶことが困難なこと」の解決を目指し、外国人と日本人が「やさしい日本語」を用いて直接的に交流を行うことが可能となるように、演劇ワークショップ、各種サークル等の「専門家」の日本語調整能力を高める講座を実施した。</p> <p>3. 成果の発信・普及、日本語教育理解の促進 (1) 日本語教育に対する理解を促すため、本事業における成果を公表するシンポジウムを催した。日本語教室や「やさしい日本語」研修の参加者が直接発信し、交流できる機会とした。 (2) 日本語教育及び「やさしい日本語」研修の内容・方法に対する検討を広く行うため、報告書を作成し公表した。</p> <p>4. 運営等委員会の開催 取組の計画・実施・評価の各段階において、委員それぞれの専門性(自己調整学習、教室活動分析、地域日本語教育、芸術を通じた人材育成等)を生かして情報提供、助言・相談を行った。地域日本語教育全体の課題や状況を把握している委員を中心に、先進性、汎用性を観点とした点検を行った。</p>
事業の実施期間	令和 4年 6月 ~ 令和 5年 3月 (10か月間)

事業の実施体制

(1) 運営委員会

実施体制	<ol style="list-style-type: none"> 1 衣川隆生(日本女子大学教授:日本語教育、自己調整学習) 2 文野峯子(人間環境大学名誉教授:教師教育、日本語教育、教室活動分析) 3 米勢治子(東海日本語ネットワーク副代表:地域日本語教育) 4 田室寿見子(東京芸術劇場事業企画課人材育成担当係長:舞台芸術における人材育成・教育普及) 5 岡田麻矢(豊島区文化商工部学習・スポーツ課生涯学習係長:社会教育) 6 金田智子(学習院大学文学部教授:日本語教育、日本語教育における内容と方法) 7 中上亜樹(学習院大学文学部准教授:第二言語習得、日本語教育)
-------------	---

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	2019年に学習院大学を拠点として、豊島区の文化商工部学習・スポーツ課生涯学習グループ及び政策経営部企画課多文化共生推進グループとの協働により、区内日本
-------------	--

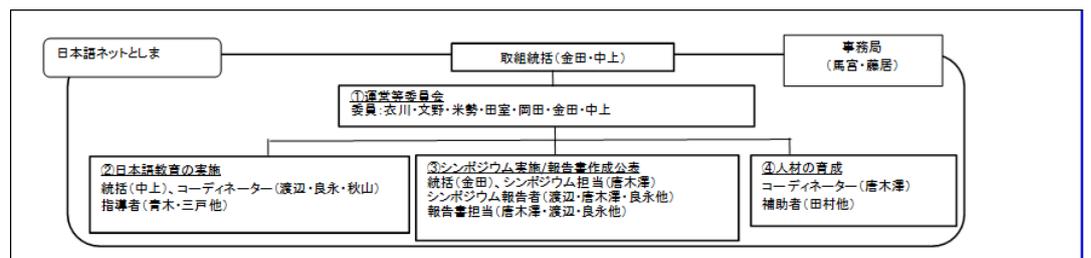
語教育関係機関のネットワーク「日本語ネットとしま」が発足した。この会議体（豊島区教育センター、区内日本語教室、日本語学校、小学校、大学、国際交流団体、学習支援団体、社会福祉協議会等）による情報交換・意見交換が活発化し、連携協力が具体化している。2019年度及び2020年度に実施した調査（日本語教育機関・組織対象調査、在住外国人対象調査）の結果を踏まえ、区内日本語教育体制における課題及びその解決方法についての検討が進んでおり、2022年度も「日本語ネットとしま」の活動を継続した。

以前は、日本語教育の実施において、消防署、区民ひろば、国際交流団体に出張授業等の依頼をして連携を図ってきたが、2021年度からは地域日本語教育の場で多文化共生に向けての貢献をしたいという専門家集団（東京芸術劇場）も現れ、連携の幅が広がった。区内の日本語学校や日本語教師養成課程を有する教育機関等との情報共有も行い、連携協力体制の拡大を図るとともに、その拠点として、地域日本語教育の普及広報活動を行っている。2022年度は、東京消防庁豊島消防署や東京芸術劇場が授業に参画したほか、雑司ヶ谷地域文化創造館でも授業を行った。

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

実施体制

指導者・コーディネーター等区分	事業における役割	氏名	所属	役職
事業担当者	統括責任者	金田智子	学習院大学 文学部	教授
事業担当者	日本語教育の実施 (統括)	中上亜樹	学習院大学 文学部	准教授
コーディネーター	人材の育成、成果 の発信・普及	唐木澤みどり	学習院大学 国際センター	PD 研究員 (非常勤)
コーディネーター	日本語教育の実施	良永朋実	学習院大学 国際センター	PD 研究員 (非常勤)
コーディネーター	日本語教育の実施	渡辺陽子	学習院大学 国際センター	専門嘱託
コーディネーター	日本語教育の実施	秋山文菜	長安大学	講師
指導者	日本語教育の実施	関根千紘	学習院大学 人文科学研究科	博士課程 後期学生
指導者	日本語教育の実施	青木身祐	学習院大学 人文科学研究科	博士課程 前期学生
指導者	日本語教育の実施	三戸貴史	学習院大学 人文科学研究科	博士課程 前期学生



各取組の報告

特定のニーズに応じた日本語教育の実施										
【活動の名称：学び続けるための基礎を作る日本語教育】1. 初期集中日本語教室<わくわくクラス>										
取組の目標	基礎的な日本語能力を持たない「生活者としての外国人」が、生活に必要な日本語の基礎を身に付け、日常生活の中で日本語を使えるようになる（A1 レベルを目標とする）。 また、日本文化や日本社会についての理解を深める。									
内容	「日本語の基礎」を身に付けることを目的に、生活に必要な日本語を学ぶ初期集中日本語教室を開講した。「学び続けるための基礎」づくりのため、標準的なカリキュラム案に基づく教材（本教室の作成教材）の中から、初期集中指導に適した内容を選定した。生活にすぐに役立つ日本語を扱いつつ、日本語の基礎構造の理解につながる活動を取り入れた。学ぶ力を育むために、言葉の意味やルールを説明するのではなく、自ら発見することに慣れるよう教材や活動を構成した。									
実施期間	令和 4 年 8 月 22 日から 令和 4 年 9 月 2 日まで	授業時間 ・コマ数	1 回 3 時間 × 10 回 = 30 時間							
対象者	豊島区及び近隣地域在住・在勤の「生活者としての外国人」	参加者	総数 21 人 (受講者 12 人、指導者・支援者等 9 人)							
カリキュラム案活用	0202 薬局・薬店を利用する/0502 地震発生時に適切に行動する/0801 対面販売で購入する/0802 飲食店を利用する/1003 行き方・停留所について質問する/1303 盗難防止（施錠）する/3101 あいさつをする/3102 自己紹介をする/3103 日本の一般的なマナーを理解し、マナーにのっとって行動する/3301 各種手続（転入・転出・外国人登録等）をする/4201 辞書や教材を利用する/4202 日常生活の中で日本語を学習する									
使用した教材・リソース	自主作成教材：紙版及び電子版（教材 PDF、音声、ビデオ） 「HIRAGANA Memory Hint」「KATAKANA Memory Hint」									
受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	5	1	0	0	1	0	0	0	1	0
パキスタン 2 名、アメリカ 1 名、コロンビア 1 名										

特定のニーズに応じた日本語教育の実施										
【活動の名称：学び続けるための基礎を作る日本語教育】										
2. 自立を目指す日本語教室 <ぐんぐんクラス>										
取組の目標	よく使われる日常的表現を用いたやりとりならできるといレベルの「生活者としての外国人」が、公的機関や各種サークル等の活動に参加し、コミュニティの中で日本語を使い、自立的・自律的に学び続けるための基礎的な力を身に付け、催し等に主体的に参加したり、日本人とのちょっとしたやりとりを行えるようになる（A2 レベルを目標とする）。 また、日本文化や日本社会についての理解を深める。 *参加希望者多数により、「自立を目指す日本語教室」は当初 1 クラスのみ開設予定だったが、「ぐんぐんクラス」と「のびのびクラス」の 2 レベルに分けた。扱う内容は同じだが、「ぐんぐんクラス」は A1~A2.1 レベル、「のびのびクラス」は A2.2 レベルを目標とした。									
内容	「学ぶ力」を身に付けることを目的に、コミュニケーションのための日本語の文法に対する意識を高める教室を開講した。社会（コミュニティ）の中で日本語を学び使うことに対する意識を高めるため、自己調整学習の考え方を取り入れた活動、言葉の意味やルール、形の違いなどについて学習									

	<p>者自身が気づき、発見していく活動などを行った。また、日本語を学びコミュニケーションすることに対する動機を高めるため、教室内外で一般日本人や各種専門家とのやりとりを促す活動、日本語を楽しむ機会を組み込んだ。</p> <p>さらに、学習者の多様な生活、学習環境に対応するため、個別・協働の学習活動とチュートリアル時間を有機的に組み合わせた。</p>									
実施期間	令和4年9月17日 から 令和5年2月26日 まで			授業時間 ・コマ数			1回 2.5時間× 18回= 45時間			
対象者	豊島区及び近隣地域在住・在勤の「生活者としての外国人」、初期集中日本語教室「わくわくクラス」を修了した学習者、基本的な動詞や疑問詞などが未習の学習者			参加者			総数 35人 (受講者13人、指導者・支援者等22人)			
カリキュラム活用	<p>0101 適切な医療機関の選択をする/0102 問診表に記入する/0103 医者説明・指示を理解し、応答する/0202 薬局・薬店を利用する/0203 薬の説明を理解し、適切に利用する/0404 交通事故に対処する/0501 避難場所・方法を確認する/0502 地震発生時に適切に行動する/0503 台風発生時に適切に行動する/0504 火災発生時に適切に行動する/0801 対面販売で購入する/0802 飲食店を利用する/0803 各種サービスを利用する/0804 商品情報(素材、注意書き等)について理解する/0805 購入額を確認・計算する/1102 行き先を指示する/1103 運賃を支払う/1201 住所・番地を確認する/3101 あいさつをする/3102 自己紹介をする/3103 日本の一般的なマナーを理解し、マナーにのっとって行動する/3201 異文化コミュニケーションについて知る/3401 ゴミ出し(ゴミの分け方)について理解する/3501 自治会行事に参加・協力する/3901 学習機会を利用する/4001 学習目標を設定する/4002 学習の自己管理をする/4201 辞書や教材を利用する/4202 日常生活の中で日本語を学習する/4401 外出や余暇の計画を立てる/4402 情報(イベント、娯楽施設、地域のサークル活動等)を収集する/4403 地域の公共施設(図書館、スポーツセンター等)を利用する/4603 電子メールを利用する</p>									
使用した教材・リソース	<p>自主作成教材：紙版、音声、ビデオ レアリア(ゴミ分別表、ハザードマップ等) 「つながるひろがるにほんでのくらし」、「JFにほんごeラーニング みなと」、「HIRAGANA Memory Hint」、「KATAKANA Memory Hint」、「Kanji Memory Hint」</p>									
受講者の出身(ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	6	0	0	0	1	0	0	0	1	0
パキスタン(2人)、アメリカ(1人)、コロンビア(1人)、台湾(1人)										

<p>特定のニーズに応じた日本語教育の実施 【活動の名称：学び続けるための基礎を作る日本語教育】 2. 自立を目指す日本語教室<のびのびクラス></p>	
取組の目標	<p>よく使われる日常的表現を用いたやりとりならできるというレベルの「生活者としての外国人」が、公的機関や各種サークル等の活動に参加し、コミュニティの中で日本語を使い、自立的・自律的に学び続けるための基礎的な力を身に付け、催し等に主体的に参加したり、日本人とのちょっとしたやりとりを行えるようになる(A2レベルを目標とする)。</p> <p>また、日本社会について理解を深める。</p> <p>*「自立を目指す日本語教室」は当初1クラスのみ開設予定だったが、参加希望者多数により、「ぐんぐんクラス」と「のびのびクラス」の2レベルに分けた。扱う内容は同じだが、「ぐんぐんクラス」はA1~A2.1レベル、「のびのびクラス」はA2.2レベルを目標とした。</p>

内容	<p>「学ぶ力」を身に付けることを目的に、コミュニケーションのための日本語の文法に対する意識を高める教室を開講した。社会（コミュニティ）の中で日本語を学び使うことに対する意識を高めるため、自己調整学習の考え方を取り入れた活動、言葉の意味やルール、形の違いなどについて学習者自身が気づき、発見していく活動などを行った。また、日本語を学びコミュニケーションすることに対する動機を高めるため、教室内外で一般日本人や各種専門家とのやりとりを促す活動、日本語を楽しむ機会を組み込んだ。</p> <p>さらに、学習者の多様な生活、学習環境に対応するため、個別・協働の学習活動とチュートリアル時間を有機的に組み合わせた。</p>									
実施期間	令和 4 年 9 月 17 日 から 令和 5 年 2 月 26 日 まで	授業時間 ・コマ数	1 回 2.5 時間 × 18 回 = 45 時間							
対象者	豊島区及び近隣地域在住・在勤の「生活者としての外国人」、疑問詞や簡単な複文が身につけており、聞き返しなどの基本的なコミュニケーション方略が使える学習者	参加者	総数 29 人 (受講者 15 人、指導者・支援者等 14 人)							
カリキュラム案活用	0101 適切な医療機関の選択をする/0102 問診表に記入する/0103 医者の説明・指示を理解し、応答する/0202 薬局・薬店を利用する/0203 薬の説明を理解し、適切に利用する/0404 交通事故に対処する/0501 避難場所・方法を確認する/0502 地震発生時に適切に行動する/0503 台風発生時に適切に行動する/0504 火災発生時に適切に行動する/0801 対面販売で購入する/0802 飲食店を利用する/0803 各種サービスを利用する/0804 商品情報（素材、注意書き等）について理解する/0805 購入額を確認・計算する/1102 行き先を指示する/1103 運賃を支払う/1201 住所・番地を確認する/3101 あいさつをする/3102 自己紹介をする/3103 日本の一般的なマナーを理解し、マナーにのっとって行動する/3201 異文化コミュニケーションについて知る/3401 ゴミ出し（ゴミの分け方）について理解する/3501 自治会行事に参加・協力する/3901 学習機会を利用する/4001 学習目標を設定する/4002 学習の自己管理をする/4201 辞書や教材を利用する/4202 日常生活の中で日本語を学習する/4401 外出や余暇の計画を立てる/4402 情報（イベント、娯楽施設、地域のサークル活動等）を収集する/4403 地域の公共施設（図書館、スポーツセンター等）を利用する/4603 電子メールを利用する									
使用した教材・リソース	自主作成教材：紙版、音声、ビデオ レアリア（ゴミ分別表、ハザードマップ等） 「つながるひろがるにほんでのくらし」、「JF にほんご e ラーニング みなと」、 「HIRAGANA Memory Hint」、「KATAKANA Memory Hint」、「Kanji Memory Hint」									
受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	9	1	0	0	0	0	0	0	1	0
	ミャンマー（3人）、台湾（1人）									

(1) 特徴的な活動風景

取組事例①

【初期集中日本語教室 <わくわくクラス> 第1回 令和 4 年 8 月 22 日】

テーマ：自己紹介をする・あいさつをする

初めて会う人に自己紹介ができること、あいさつができることを目標として、相手に伝わる発音で名前や出身を伝える練習をした。あいさつは場面や時間帯に応じた表現を確認し、状況に応じた適切なあいさつ表現を言えるように繰り返し練習した。最後は、教室内を動き回りクラスメート同士で自己紹介をし合った。

写真左：聞き取りの練習として、教師のモデル発話を聞いてイラストを選ぶという練習をしている様子
写真右：クラスメート同士で自己紹介のロールプレイをしている様子



取組事例②

【自立を目指す日本語教室 <ぐんぐんクラス・のびのびクラス> 第11回 令和4年12月3日】

テーマ：消防に119番通報する（東京消防庁豊島消防署目白出張所の方々による出張授業）

授業で学んだ119番通報の実践練習として、東京消防庁豊島消防署の消防士の方々に来ていただき、火災時と救急時の通報訓練を行った。自分の住所や連絡先のほか、火事の様子や倒れている人の様子を伝える練習を行った。また、消防士さんへの質疑応答では、火災を防ぐために普段から気を付けておくことや、通報時に住所がわからない時の対処法など、実際の生活に即した質問をしている様子が見られた。授業の最後には、消防車の見学や実際に消防士の方々が着ている消防服や消火装備を装着する体験をした。

写真左：グループに分かれ、消防の方と通報の練習をしている様子

写真右：実際に使われている消防車の見学と、消防服を着る体験をしている様子



取組事例③

【自立を目指す日本語教室 <ぐんぐんクラス・のびのびクラス> 第15回 令和5年1月14日】

テーマ：自分の国の文化を紹介する、年末年始の過ごし方を発表する

学習者の出身国や地域の年末年始の過ごし方やお正月についてポスターを作成し、それをういて発表をした。これまでに自分が撮った写真から発表にふさわしいものを選定したり、インターネットで由来を調べたりといった事前準備のほか、それらを日本語でどのように説明するかなどを練習してから、グループで発表を行った。また、日本語を用いて人前で発表するのは初めてであったため、発表の流れや定型表現なども練習した。発表の最中には、学習者同士で質問をしたり、コメントをしあったりしてい

る様子うかがえた。

写真左：フィリピンでお正月に食べる料理を紹介している様子

写真右：中国のお正月の飾りやその意味などの風習を紹介している様子



取組事例③

【自立を目指す日本語教室<ぐんぐんクラス・のびのびクラス> 第16回 令和5年1月21日】

テーマ：日本文化を楽しむ、紙芝居を作る（東京芸術劇場の方々の出張授業）

東京芸術劇場の方々による紙芝居「桃太郎」を用いたパフォーマンスを鑑賞した。その後、学習者が持ち寄ったそれぞれの国の昔話や伝説をグループ内で共有し、グループ全員で一つの紙芝居を制作した（写真左）。制作の際には、イラストを描く、イラストに色を塗る、セリフを考える、考えたセリフを日本語で書くなど、学習者それぞれの個性や能力が発揮できるような分担がなされていた。最後に、教室全体でそれぞれの紙芝居を発表した。発表の際には、準備した絵やセリフのほか、楽器や声を使って効果音を出すなどの工夫も見られた。

普段の学習では見ることのなかった学習者の特技（イラストを描いたりモノマネをしたり）をうかがうことができた。

写真左：役割分担をして紙芝居を制作している様子

写真右：クラス全体の前で、制作した紙芝居を発表している様子



(2) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

1. 初期集中日本語教室 <わくわくクラス>について

(1) アンケート結果から

コース最終日にアンケートを実施し、学習者からのフィードバックを得た。日本語使用、日本語能力、日本での生活のしやすさ、日本の文化・社会・習慣の知識、授業外の学習時間について聞き、回答はいずれもコース参加前と比べると向上したとする回答だった。コースでの学習が実際の生活での日本語使用と日本への理解、生活しやすさにつながり、日本語の上達の実感を得ていたと思われる。学習時

間も増加しており、短期集中型教室であることが学習習慣作りを促したと考えられる。

教室の内容に満足しているかという問いについて、「5 かなり満足」から「1 満足していない」までの5段階評価で、5と4とする回答が100%であり、学習者はコースに満足していた。「もっと日本語を勉強したいと思うか」という問いへの回答も同様に「5 かなり思う」から「1 思わない」までの5段階評価で、5と4とする回答が100%だった。学習者に日本語学習継続の意欲を持たせたことも本取組の成果と考える。

(2) 学習ポートフォリオと教師の観察から

本コースでは自主作成した学習ポートフォリオを使用している。学習ポートフォリオを用いた活動の一環として、コース初日と最終日に自己評価を行った。各回テーマの目標に対して「練習が必要」、「自信はないがなんとかできる」、「自信を持ってできる」の3段階で評価した。初日の記述と最終日の記述を比較すると、すべての学習者が1段階あるいは2段階向上したと記述していた。このことから授業で扱ったテーマのやりとりについて、学習者はできるようになったと実感していたことがわかる。

観察記録によると、ほとんど日本語を知らない状態で参加した学習者であっても、教師による繰り返しやスピード等の調整があれば、本コースで扱った場面のやりとりにおいて最低限の行為を日本語で達成できるようになったことがわかる。文字学習においては、日本語の文字を知らなかった学習者もひらがなとカタカナの概要をつかみ、五十音図を参照しながらではあるが文字を読むようになっていた。

(3) 学習者同士の関係性について

学習者同士で授業開始時間の前に本学のフリースペースである学生ホールで勉強しあったり、学習者同士でLINEグループを作ってやりとりしたり、授業後に大学周辺を散策しようと呼びかけたりするなど、短期ながら毎日会うことで良好な関係性を築いていた様子が見られ、授業中のやりとりも次第に和やかになっていった。

(4) 参加の状況から

全10回の授業に全て出席した学習者は12名中9名いた。1回欠席した学習者が2名、2回欠席した学習者が1名いたものの、欠席理由は自分や家族のやむを得ない事情によるものだった。出席率の平均は97%であった。

以上のことから、短期集中型日本語教室は基礎的な日本語の習得の面でも、学習継続をしやすくするという面でも、初期段階の日本語学習に適していると考えられる。

2. 自立を目指す日本語教室<ぐんぐんクラス・のびのびクラス>について

(1) アンケートの結果から

コース終了時のアンケート結果からは、学習者全員が「日本語の使用頻度が高くなった」、「日本語のスキルが向上した」、「日本での生活が送りやすくなった」、「日本の文化や習慣、社会についてもっとよく知ることができた」と回答し、学習者1名を除き教室外での日本語学習時間が増加したと回答している。また、コースへの満足度については全員が「満足である」と回答し、今後の日本語学習の継続についても肯定的な評価を得た。

(2) 学習ポートフォリオ・自己評価から

コース開始時・終了時の日本語能力に対する自己評価と、毎回の授業終了時のポートフォリオ記録を見ると、全ての学習者がほとんど全ての学習項目について、コース開始時よりも高い評価をつけている。また、学習者によって程度は異なるものの、日本人との交流や日本語を用いたコミュニケーションへの意欲、他のコミュニティへの参加意欲が高まったこと、日本語学習の継続やさらに上のレベルへの目標設定などのコメントもあった。また、日本語を使用することに前よりも自信が持てるようになったというコメントも見られた。

(3) コーディネーター・講師による観察から

ぐんぐんクラスの学習者は、コース開始時に行った口頭でのレベルチェックでは、「いつ日本に来ましたか」や「どこに住んでいますか」といった簡単な質問を理解するのも難しかった。しかし終了時には、昨日どこで何をしたか、それはどうだったかなども話せるようになり、実際に図書館で利用登録をしたり、買い物の際に日本語で要望を伝えられるようになった学習者もいる。また、わからない言葉や漢字がある時、あるいは相手の発話が聞き取れなかった際などに、聞き返したり説明を求めたりといったストラテジーも少しずつ使えるようになった。

のびのびクラスの学習者は、ぐんぐんクラスの学習者よりもコース開始時から知っている語彙や表現が多かったが、コースを通してそれらを適切に運用したり、相手に働きかけたりするストラテジーも使えるようになった。

以上のことから、両クラスにおいて、日本語能力とともに日本語学習や使用の頻度・意欲の向上が概

ね見られ、自立に向けての準備が少しずつ整ってきたことがわかる。

3. 特定のニーズ及び課題の充足について

「初期集中日本語教室」とそれに続く「自立を目指す日本語教室」を実施することにより、地域在住外国人のニーズに応えることが一定程度でき、本地域の課題「1. 日本語を学べる機会が質量共に不十分・不安定であり、特に、学び続けるための基礎を身に付ける場がないこと」を解消する道筋ができた。ただし、今回の取組は、いずれも1期間・1か所での実施であり、ニーズに広く応えたとは言えない。今後の課題としたい。

(3) 今後の改善点について

1. 初期集中日本語教室 <わくわくクラス>について

・「日本語能力の伸びの評価」という点について、学習者による自己評価は行ったが、客観的な評価の方法については検討不足だった。ロールプレイやタスク活動など、パフォーマンス評価の方法、授業の活動の中で評価できる方法を検討し、授業活動の中に計画的に組み込んでいきたい。
・アンケート結果によると、貸出用タブレットについて、半数の学習者が活用していない。配布教材の扱い方を丁寧に指導すると同時に、授業の内容との関連付けを明確にする必要がある。

2. 自立を目指す日本語教室<ぐんぐんクラス・のびのびクラス>について

・コース受講前後の日本語能力の伸長について、学習者による自己評価は行えたものの、客観的評価は行うことができなかった。このコースの対象は「生活者としての外国人」であるため、いわゆる「テスト」を用いた評価を行う必要はないと考えるが、学習意欲の維持や向上のためにも、学習者の自己評価以外の評価方法を検討する必要がある。
・学習内容に関する音声や動画を準備し、学習者には授業の予習や復習で活用するように伝えていた。コース開始からしばらくは、動画へのアクセス数も多く、自宅での学習で活用しているという学習者の声もあったが、コースの後半では活用できている様子はあまりうかがえなかった。学習者がこのコースのやり方に慣れてきたことも一因だと考えられるが、学習者が繰り返し利用したくなるようなコンテンツそのものの工夫に加え、自宅学習だけではなく授業の中でも活用するなど、学習リソースとしての見せ方にも工夫が必要である。
・自立的・自律的に学び続ける力を身に付ける工夫として、各授業後にチュートリアル時間を設け、学習者とコーディネーターあるいは講師が1対1で教室外での日本語学習の状況や生活上の悩みなどを話す機会を設けた。その際、チュートリアルの割り当てではない学習者は、その回の学習内容やこれまでの学習内容について復習や練習をおこなったり、担当講師に質問したりするよう促していた。しかしながら、こちらの意図を十分に伝えることができず、学習者にとっても自発的に何をするか考えたりこの時間を使って自分の学習を管理することは難しかったように思う。したがって今後は、個別学習あるいは他の学習者との協働学習で活用できる学習方法や練習方法の例を提示するほか、自立的・自律的な学習に役立つリソースの提供など、さらなる工夫が必要である。
・今年度は受講希望者が想定の倍以上であったことと、講師が不足していたことから、コース途中での参加希望者を受け入れることが難しかった。しかしながら、実際にはコースの途中で教室に参加できなくなった学習者も数名いたため、途中からの参加者も受け入れられる態勢を整えることも今後の課題としたい。

取組の成果の発信や普及及び住民の日本語教育への理解の促進【必須】

【活動の名称：参加型シンポジウム「日本語を学ぶ、日本語でつながる」の開催】

取組の目標	日本語教室や外国人支援組織の関係者だけでなく、一般住民に対して、地域日本語教育や生活者としての外国人に関する理解を促す。そのために、本事業の成果を公開するだけでなく、当事者である日本語学習者自身がその学びの成果を披露したり、外国人が直接一般の日本人と交流したりする活動をシンポジウムに組み込み、外国人参加者も増やす。
内容	成果の発信・普及、住民の日本語教育への理解の促進を目指し、大きく以下の2つの活動を行った。 1. シンポジウムの開催 (1) 本事業の取組（日本語教育の実施、人材の育成）の報告 (2) 教室参加者（取組2 日本語教育）の成果報告

	(3) 研修参加者（取組 4 人材の育成）による実践 2. 取組 2、取組 4 の報告書の作成・公開 ・取組の内容・方法・課題がわかる報告書を作成し、シンポジウム及び大学 HP 等で公表した。報告書はネット上での公開後、意見収集を行い、次年度以降の実践に生かす（意見集約は 2023 年度）。									
実施期間	令和 5 年 2 月 26 日			授業時間 ・コマ数	1 回 3.5 時間 ×1 回 =3.5 時間					
対象者	豊島区及び近隣地域の住民、「生活者としての外国人」に対する日本語教育関係者			参加者	総数 77 人 (受講者 59 人、指導者・支援者等 18 人)					
カリキュラム 案活用	なし									
使用した教材・リソース	なし									
受講者の出身 (ルーツ)・ 国別内訳 (人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インド ネシア	ペルー	フィリ ピン	日本
	7	1	0	0	4	0	0	0	1	42
	ロシア(1人)、台湾(1人)、カナダ(1人)、メキシコ(1人)									

(1) 特徴的な活動風景（2～3 回分）

取組事例①

【シンポジウム 第 1 部 令和 5 年 2 月 26 日 13:30-15:00】

地域における日本語教育について、以下のように報告を行った。

- ・趣旨説明
- ・豊島区の多文化共生施策の現状（豊島区多文化共生推進担当課）
- ・東京における地域日本語教育のあり方の検討について（東京都生活文化スポーツ局）
- ・初期集中日本語教室の報告（学習院大学）
- ・やさしい日本語ワークショップの報告（学習院大学）
- ・豊島区内の日本語学習支援団体の活動紹介（ポスター発表形式）

写真左：初期集中日本語教室の報告の様子

写真右：パネルにポスターや成果物が掲示されている様子



取組事例②

【シンポジウム 第 2 部 令和 5 年 2 月 26 日】 15:00-17:00

「日本語でつながるワークショップ（日本語教室の公開授業）」（東京芸術劇場）

「やさしい日本語」ワークショップの受講者を含む東京芸術劇場のファシリテーターによる日本語教室

の公開授業（ワークショップ）を実施した。日本と外国人と一緒に体を動かしながら、日本語をいろいろな動きや形にすることを通して交流するプログラムで、「やさしい日本語」ワークショップ受講者や、日本語教室の学習者、一般参加者がともに活動した。

- ・竹の棒を使ったアクティビティ（「前後左右」のことばと動き）
- ・スクリーンに出る日本語を見て、グループで形や動きを考えて表現する
「ナイフとフォーク」、「飛行機」、「動物園」、「東京」など
- ・活動終了後に振り返りを行い、感想を共有した。

写真左：竹の棒を使ったアクティビティの様子

写真右：活動終了後の振り返りの様子



（２）目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

1. シンポジウムの開催

(1) 当事者である外国人の参加について

シンポジウムに参加した59名のうち、約3割の17名が外国出身者であり、これまでのシンポジウムに比べて多くの外国人の参加を得ることができた。何らかの方法で日本語を学んでいる人は半数以上の9名だった。アンケートの記述から、「日本人と話すのが楽しいです」「日本人と交流したい」「たくさん話したい」「もっと日本語教室をやってほしい」等、日本人との交流や日本語学習機会の提供を希望していることが明らかとなった。

(2) 住民の地域日本語教育への理解の促進について

参加者のうち10名（16.95%）は、これまで地域日本語教育との関わりがない住民であった。また、アンケートの記述から「豊島区や各サークルの日本語教育への情熱に感服した」「もっと多くの人に知ってもらい、参加してもらえるといいと思う」等、理解の促進に一定の成果があったと考える。

(3) 成果の発信について

第1部で、取組2及び4の報告、活動紹介における教室参加者の成果物の紹介ができた。第2部では、取組4の研修参加者（東京芸術劇場）によるワークショップが開催でき、他の研修参加者もこのワークショップに参加することで「やさしい日本語」の実践機会を提供できた。

(4) アンケート結果から

「新しい情報や知識」が「たくさんあった」、「あった」を選択した人を合わせると93.75%で、「地域の日本語教育についての理解」も「おおいに深まった」、「深まった」を選択した人を合わせると91.30%となり、シンポジウムへの参加を通して、新しい情報や知識を得て、地域の日本語教育についての理解が深まった人が多く、満足度が高かった。

2. 報告書の作成・公開

・日本語教室及び研修について報告書を作成し、シンポジウムにて配布した。報告書の公開により、本事業の取組内容を広く知らせるだけでなく、外国籍住民に対する日本語教育、日本人の日本語調整能力の向上の重要性や課題について伝えることが可能となり、地域住民の日本語教育への理解を促す一助となると考える。

3. 特定のニーズ及び課題の充足について

シンポジウムを実施することにより、課題として掲げた「2. 人とつながる場面・機会が乏しく、在

住外国人が日本語を社会の中で使い学ぶことが困難なこと」の解決に向けて、2つの面からアプローチすることができた。まず、「やさしい日本語」ワークショップの参加者が、実際に「やさしい日本語」を用いて活動を説明したり指示したり、相談したりできたことである。次に、外国人と日本人がともに活動し何かを創り出す場となったことである。

(3) 今後の改善点について

- ・「参加型」シンポジウムとして行うことにより、従来よりも気軽に外国人や住民の方に参加してもらえるようになったと考えられるが、より多くの方に参加していただくためにはさらなる工夫が必要である。今回の一般参加者（地域日本語教育とこれまで関わりのない住民の方）がシンポジウムを知ったきっかけの6割は、知人の紹介だった。これまで関わりのない人にとって、ネット情報などとは異なる、いわゆる口コミが情報提供の重要な役割を担っている。シンポジウムだけでなく、日頃から日本語教室等の学習の場や交流の場を広く公開し、日本語学習や交流の良さを知ってもらう機会を作るなどして、一般住民とのつながりを作っていくなど、広報の工夫も検討していきたい。
- ・第1部で本事業の取組や教室参加者（取組2）の成果物を紹介することができたが、教室参加者等の外国人当事者自身が成果報告を行うなど、より主体的な参加ができるかとのよいのではないかと。シンポジウムの外国人参加者にとっても日本人参加者にとっても、日本での生活の中で日本語学習や交流を進めている人の話を聞くことは、日本で生活する上でのヒントとなりうる。

(取組4) 取組2や取組3にかかる人材の育成 【活動の名称：各種専門家に対する「やさしい日本語」ワークショップ】			
取組の目標	外国人と日本人が接する機会、交流する機会を充実させることを目指し、日本人等日本語母語話者の日本語調整能力を向上させる。本取組では特に、外国人対象あるいは外国人と日本人の両方を対象とした催しを企画する専門家（演劇、防災等）が、催しの案内、催しの実施において「やさしい日本語」が使えるようになることを目指す。		
内容	<p>ワークショップ形式で以下の内容を扱い、実際に日本語の調整ができるようになることを目指した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本語学習者に対する理解：日本語学習者の日本語や習得過程について理解する。 2. 「やさしい日本語」に対する理解：「やさしい日本語」の特徴、日本語の構造、「やさしにちチェッカー」等のアプリの効果的な使い方などについて学ぶ。 3. わかりやすい指示・説明：口頭でのやりとりにおいて、どのようにすれば日本語が伝わりやすくなるのかについて学ぶ。「やさしい日本語」の法則や留意点を学んだ上で、相手に合わせて日本語を調整する能力を身に付けていく。 4. わかりやすい案内文：文字によるやりとりにおいて、どのようにすれば内容が伝わりやすくなるのかについて学ぶ。 <p>以上の活動を通じ、日本語調整能力を高めると同時に、日本に暮らす外国人に対する理解を深めた。</p>		
実施期間	令和4年9月3日 から 令和4年10月8日 まで	授業時間 ・コマ数	1回 3時間 × 4回 =12時間
対象者	日本語を学習中である在住外国人を対象としたイベント等を企画・運営する人（各種専門家）	参加者	総数 38人 (受講者 28人、指導者・支援者等 10人)
カリキュラム 案活用	なし		
使用した教材・リソース	各回の講師が作成した教材を使用した。リソースとしては、食物アレルギー調査票、小学校からのおたより、接触場面のビデオ、案内文例、『研修用マンガ教材 日本語教室をのぞいてみると』（金田智子（編）2017）他		

受講者の出身 (ルーツ)・ 国別内訳 (人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インド ネシア	ペルー	フィリ ピン	日本
										28

(1) 特徴的な活動風景 (2～3回分)

取組事例①

【第3回 令和4年9月24日】

テーマ：「やさしい日本語」を使ってみよう2 わかりやすい案内文

講師：野田尚史氏

案内文など書かれたものによるやりとりにおいて、どのようにすれば内容が伝わりやすくなるのかについて学んだ。

- ・グループ毎に異なる「案内文」(コインロッカーの案内、ホテルの交通案内等)について、各グループで話し合い、わかりやすい「案内文」に書き換えを行った。
- ・書き換えた「案内文」の発表とディスカッションを行った。

写真左：グループで案内文の書き換えについて話し合っている様子

写真右：各グループの代表による発表の様子



取組事例②

【第4回 令和4年10月8日】

テーマ：「やさしい日本語」を使ってみよう3 相手に応じた日本語調整

講師：中上亜樹、金田智子

コミュニケーションを進めながら、相手に合わせてその場で日本語を調整できるようになることを目指して行われた。

・前半：相手に応じた日本語調整のために必要な視点について、グループディスカッションを交えながら学んだ。

・後半：

(1) グループ毎に異なるテーマ(自転車安全講習、干支等)を説明するためのポスターを作成した。

(2) 作成したポスターを使って、「企画・運営者がイベント会場で参加者に説明し、その場で参加者の質問に答える」ロールプレイを行った。

写真左：グループでポスターを作成している様子

写真右：ロールプレイの様子



(2) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

1. アンケート結果について

各回終了後にアンケートを行い、参加者からのフィードバックを得た。

(1) 研修の内容・方法

「講座の内容」は、「とてもよい」、「よい」が各回概ね 100%、「講座のわかりやすさ」は「ちょうどよい」が各回 83.33~95.24%、「新しい情報や知識の獲得」は「おおいにあった」、「あった」が各回 100%、「講座でのやりとりを通じた考えの深まり」は「おおいに深まった」、「深まった」が各回 100%となり、外国人と関わる専門家のための研修として満足度が高かった。

(2) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育への理解

「深まったと思う」、「まあまあ深まったと思う」を選択した人を合わせると各回 92.86~100%となった。「やさしい日本語」研修で、「生活者としての外国人」が関わる日本語によるコミュニケーション場面が多く取り扱われたことにより、「生活者としての外国人」に対する理解につながったと考えられる。

(3) 日本語調整能力についての意識

申込の段階で、参加者には「自分の日本語が相手に伝わっているかわからない」「『やさしい日本語』を知っていてもうまく使えない」等のコミュニケーション上の課題があったが、第4回のアンケートでは、「やさしい日本語」が「使えるようになったと思う」、「少し使えるようになったと思う」を選択した人が合わせて8割近くとなり、「やさしい日本語」を使って、「外国人と話したい」を選択した人も8割近かった。よって、多少なりとも「やさしい日本語」を使うことに自信を得て、「やさしい日本語」を使いたいという意欲を持つことができたと考えられる。

2. 特定のニーズ及び課題の充足について

(1) 4割近くが「外国人も参加するイベントの計画」があり、1割が「これから計画したい」と答えた。現在関わっている現場での「やさしい日本語」の活用（16.67%）を意識している参加者もあり、多くの参加者が「やさしい日本語」を活用していくと考えられる。

(2) 「にほんごでつながるワークショップ（日本語教室の公開授業）」の運営・参加

2月26日開催のシンポジウムでの活動において、研修参加者がファシリテーターとして活躍し、他の研修参加者も「やさしい日本語」の実践の機会としてこの活動に参加した。

外国人に対応をしたり、各種のイベントや交流活動を行ったりする際に、「やさしい日本語」に意識を向け、使おうとする人、使える人を育てることができた。これにより、掲げた課題「2. 人とつながる場面・機会が乏しく、在住外国人が日本語を社会の中で使い学ぶことが困難なこと」が、部分的ながらも解消されていくことと思われる。

(3) 今後の改善点について

・本研修は、4回（1回につき3時間、計12時間）で計画し、「やさしい日本語」研修としては時間をかけた研修だった。しかし、参加しやすさに配慮し単発参加も可とした結果、4回とも参加した人は全体の2割強で、1回のみ参加者は3割近くとなった。今後は、全回に参加できるような工夫を考え、連続講座として回を重ねる中で学びを深められるような研修の形も検討する必要がある。

・「やさしい日本語」が使えるようになったか、日本語調整能力が高まったかどうかについては、アンケートにおける自己評価以外に確認ができていない。効果について知るための方法を検討することも必要である。

・「やさしい日本語」を活用できるようになるために、さらなる学びの機会や、実践の機会の提供をしていくことが考えられる。

事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

社会状況に影響を受けることなく、外国人が社会の一員として主体的・協働的に日本語を学び続けることのできる学習環境の基盤をつくる。そのために、2022年度は以下を目的として事業を進める。

1. 初歩レベルの学習者に対し、集中的な初期指導プログラムを設計・実施し、日本語の基礎の形成、日本語学習に対する動機・意欲の向上をはかる。

2. 社会生活を営みながら日本語学習を自立的・自立的に行えるようになるプログラムを設計・実施する。
 3. 外国人と日本人が接する機会、交流する機会を充実させるべく、日本人の日本語調整能力を向上させる。
- 1及び2においては、感染症のまん延などによって学びが途絶えることのないように、また、個別学習と協働学習それぞれの充実をはかるため、ICTを積極的に活用しその効果を探ると同時に対面学習および対面コミュニケーションの意義も明らかにしていく。

(2) 特定のニーズの充足に向けて試行した方法

1. 課題1「日本語を学べる機会が質量共に不十分・不安定であり、特に、学び続けるための基礎を身に付ける場がないこと」について
 - (1)「初期集中日本語教室（取組2 わくわく教室）」と、「自立を目指す日本語教室（取組2 ぐんぐん・のびのび）」を設けた。初期集中日本語教室は豊島区及び近隣にはこれまで存在しなかったものである。月～金各3時間、全10日の教室であり、学習を毎日行うこと、毎日教室でやりとりをすることによる習得効果をねらった。教室外の学習をしやすいするためタブレット端末を貸し出した。また、有職者も通うことができるように、夏休み時期である8月の平日に実施した。文字学習も行い、日本語の基礎を培い、学習継続に対する動機づけを高めた。

自立を目指す日本語教室では、学習者が自分で学習を管理できる能力・管理する習慣を身に付けられるよう、学習ポートフォリオを作成し、授業の前後で教室内外の学習を記録する時間を設けた。また、教室外でも自ら日本語学習に取り組めるよう、チュートリアルの時間を設けて、コーディネーターや講師と日本語学習についての進捗状況の共有や相談ができる場を設けた。
 - (2) 課題2「人とつながる場面・機会が乏しく、在住外国人が日本語を社会の中で使い学ぶことが困難なこと」について
 - (1) 外国人も参加できるイベント等を企画・運営できる人を増やすことを目的に、「やさしい日本語」の研修をワークショップ形式で開催した（取組4）。全4回、計12時間という、一般的な「やさしい日本語」研修よりも長時間にわたるワークショップであり、「やさしい日本語」を実際に使えるようになること、日本語を調整できるようになることを目指した。
 - (2) 外国人当事者や一般の日本人が参加しやすく、また、地域日本語教育への理解が促されるよう、参加型シンポジウムを実施した（取組3）。具体的には、誰もが気軽に参加できるワークショップ（「日本語でつながるワークショップ」日本語教室の公開授業）を行い、外国人と日本人は日本語を使いつつ、体を動かし、力を合わせて様々な活動をした。

(3) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

1. 課題1「日本語を学べる機会が質量共に不十分・不安定であり、特に、学び続けるための基礎を身に付ける場がないこと」について
 - (1) これまで、豊島区及び近隣には初歩段階の学習者が学べる日本語教室がなかった。初期集中日本語教室を開催することにより、新たに日本にやってきた日本語未習者や、安心安全な生活をするには不十分な日本語能力で生活してきた人たちが学べる場、確実に基礎作りのできる場を提供できた。

アンケート結果からは開講期間中の授業外学習時間の増加があったことがわかり、短期集中的に学ぶことが学習習慣を身に付けることにつながったことがうかがえる。ICTの活用については、学習者の半数は貸し出したタブレット端末を使って授業外で学習したとアンケートで回答しており、学習機会の保障につながったと考える。毎日教室に通うことにより、習得の実感や、日本語でのコミュニケーションの達成感を得ることができたことや、対面学習および対面コミュニケーションを通じて、学習者間の良好な関係性が築かれたことも、参加者12名全員が高い出席率を維持し、脱落者を出さなかったことにつながったと考える。
 - (2) 自立を目指す日本語教室では、毎回、「実行する意味の感じられる予習」を課していたこと、チュートリアルとして個別に学習状況の聞き取りやサポートの時間を取っていたことから、教室外でも積極的に日本語学習に取り組む習慣が身につき始めた様子がうかがえた。また、ヨガ教室に通ってみたい、子どもの保育園や学校の行事に積極的に参加したい、ママ友や地域の人と交流したいといった、日本語教室以外のコミュニティへの参加に意欲的になった学習者も多く、このコースでの学習や活動を通して日

本語でのコミュニケーションを積極的に行おうとする姿勢を促すことができたのではないかと考える。

両クラスにおいて、日本語能力とともに日本語学習や使用の頻度・意欲の向上が概ね見られ、学び続けるための基礎を身に付ける機会が提供できた。

2. 課題2「人とつながる場面・機会が乏しく、在住外国人が日本語を社会の中で使い学ぶことが困難なこと」について

(1) イベント等を企画・運営する専門家を対象とした「やさしい日本語」ワークショップ（取組4）についてのアンケートでは、内容のわかりやすさ、新しい知識や情報の獲得、考えの深まり、いずれの項目も満足度が高かった。ワークショップ形式で行ったことにより、ペアやグループでの話し合いや共同作業、全体共有を通しての学びが多くあったことがアンケートからもうかがえた。イベント等の開催（4割）、イベントの計画（1割）を予定しているという回答から、今後、「やさしい日本語」を活用した外国人と日本人の交流の場づくりが広がるものと考えられる。

(2) シンポジウム（取組3）の参加者のうち、地域日本語教育との関わりがない住民は全体の約17%で、これまでより多くの参加を得ることができた。外国人の参加も全体の約3割であり、また、参加者の年齢層も幅広く、多様な人々が日本語を調整し合い、ともに活動して一つのものを創り出すという貴重な機会となった。外国人も日本人も、ワークショップへの参加を通して相互交流を楽しむ様子が見られた。アンケートでは、「新しい知識や情報」を得た、「地域日本語教育の理解の深まり」があったとする回答はそれぞれ9割を超えていた。回答の中には「もっと多くの人に知ってもらい、参加してもらえるといい」等の記述があり、地域日本語教育への理解の促進が進み、一定の成果が得られた。

（4）地域の関係者との連携による効果、成果等

1. 取組2「学び続けるための基礎を作る日本語教育」において

「自立を目指す日本語教室」では、東京消防庁豊島消防署目白出張所や東京芸術劇場の方に出張授業を依頼した。消防署の方々には119番通報時のやりとり練習のほか、日常生活において火災や事故を防ぐために気を付けることについて質疑応答を行った。東京芸術劇場の方々には、演劇的要素や音楽を用いた授業を担当していただいたほか、体を使って日本語を楽しむワークショップを開催してもらった。これらの連携を通して、日本語教室以外の地域のコミュニティへの参加や日本人との交流に対する学習者の興味や意欲を高めることができたほか、日本語教室の先生以外の人と交流することで自分の日本語能力に自信が持てるようになるきっかけともなった（コース終了時の学習者のコメントより）。

その一方で、こういった外部団体の特色・特長を最大限に生かしつつ、それを日本語教育の一環として行うことについて、双方の期待のずれがあり、活動が滞る時もあった。今後の課題である。

また、区内の外国人支援団体等から希望があり、見学を受け入れたほか、支援団体の方には教室参加を希望する学習者の申し込みを手伝っていただいたり、初日の授業に同行していただいたりするなど、学習者を教室につなげる役割を果たしていただけた。

2. 取組3参加型シンポジウム「日本語を学ぶ、日本語でつながる」において

豊島区等への広報協力以外に、学習院大学が事務局を務める豊島区日本語教育関連機関のネットワークである「日本語ネットとしま」に参加する日本語学習支援団体に、第1部報告における活動紹介への協力を依頼し、シンポジウムに参加した6団体がポスターによる活動紹介、欠席の4団体も団体を紹介するチラシの掲示により紹介することができた。東京芸術劇場には第2部ワークショップ（日本語教室の公開授業）を担当してもらった。シンポジウム当日は、情報提供のスペースを作り、区内の多文化共生、外国人支援に関わる複数の団体のイベントのチラシや多文化共生に関する冊子等を置き、広報に協力した。シンポジウム実施や広報活動における協働を通じ、相互の連携が進んでいる。

3. 取組4「各種専門家に対する「やさしい日本語」ワークショップ」において

豊島区民社会福祉協議会、東京芸術劇場等、「やさしい日本語」ワークショップの対象者が所属する団体に予め連絡し、直接広報するとともに、ニーズや参加しやすい日程等を相談することができた。豊島区民社会福祉協議会が主催する「やさしい日本語」研修の際に、今回の「やさしい日本語」ワークショップのチラシも紹介していただき、社協の研修の参加者が今回の研修にも参加するなど、連携により区内における「やさしい日本語」の普及にも貢献できた。

（5）事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

1. 取組2「学び続けるための基礎を作る日本語教育」において

日本語教室の開講にあたり、豊島区を通して区内の保育園・幼稚園や公立小中学校、公共施設などにチラシを配布したほか、希望する私立の保育園・幼稚園や外国人利用の多いレストランなどにもチラシを送付した。また、学習院大学のHPでの広報のほか、豊島区のHPや区報「広報としま」でも教室の情報を掲載してもらった。教室終了後に報告書を作成し、取組3で実施したシンポジウムで成果報告をした。

2. 取組3 参加型シンポジウム「日本語を学ぶ、日本語でつながる」において

シンポジウム開催に際し、豊島区学習・スポーツ課に依頼し、区報「広報としま」、豊島区HPによる広報、区内施設へのチラシの配布に協力いただき、区内全域に広報することができた。その他、学習院大学のHPやポスター掲示、「日本語ネットとしま」や、豊島区の無料学習支援ネットワーク「とこネット」へも広報協力を依頼することで、地域日本語教育関係者だけではなく、日本語学習者や関心を持つ住民への広報が可能となった。取組の報告書を作成し、シンポジウムにおいて事業成果を報告し、学習院大学HPでも公開した。来年度以降、意見集約を行う予定である。

3. 取組4「各種専門家に対する「やさしい日本語」ワークショップ」において

対象となる専門家が所属する団体に直接広報を行ったほか、取組3と同様、豊島区学習・スポーツ課に依頼し、区内施設へのチラシの配布に協力を得た。その他、「日本語ネットとしま」や、「とこネット」へも広報協力を依頼した。取組の報告書を作成し、シンポジウム第1部で報告を行った。

(6) 改善点、今後の課題について

1. 日本語教育の実施について

(1) ICTを積極的に活用しその効果を探るという目標について、各教室で教材データ(PDF、音声等)を共有し、外部の学習リソースを紹介するなど活用を促したが、対面での学びとの関係が明確な内容と提供の仕方ではなかった。アンケートや学習者への聞き取りによれば、提供した教材データを「自宅学習で使用した」、「発音の確認に音声を聞いた」とのことであり、聞き取りや発音など、習熟や得意不得意に個人差があるものを授業外で補う手段として有効であることがうかがえる。自主的にデータを活用して学びに生かした学習者もいたが、活用の仕方がわからないまま利用しなかった学習者も半数程度いたため、使い方や活用方法を授業時間内で説明し、実際にやってみる時間を設ける必要がある。また、提供した教材データやリソースを授業外での利用を促し、授業内容とのつながりを強くする工夫が求められる。

(2) 「初期集中日本語教室」とそれに続く「自立を目指す日本語教室」を実施することにより、地域在住外国人のニーズに応えることが一定程度でき、本地域の課題「1. 日本語を学べる機会が質量共に不十分・不安定であり、特に、学び続けるための基礎を身に付ける場がないこと」を解消する道筋ができた。ただし、今回の取組は、いずれも1期間・1か所での実施であり、ニーズに広く応えたとは言えない。今後は、「日本語ネットとしま」の他機関・組織と協力し、複数期間・複数箇所で開催できるよう体制を整えていきたい。また、自立を目指すためには、基礎段階の日本語学習において、学ぶ力、自律学習能力を育てる必要があるが、この点については現在の学習ポートフォリオの活用だけでは十分とは言えない。コース全体をあらためて自律学習という視点で見直す予定である。

(3) 本事業では、教室運営等を通して「特定のニーズ」をさらに探ることが課題となっていた。学習者とのやりとりにより、職場で日本人とおしゃべりをしたい、幼稚園で他の保護者と友達になりたい、といった希望があることがわかった。これらは特定のニーズとは言えないが、こういった希望を持ちながらも学習が続きにくい人の学習及びコミュニケーションの様子を授業において観察した結果、ある種の傾向が明らかとなった。学習経験が乏しいために、外国語の学習・習得に関する根拠のないビリーフを持っており、それが学習継続を妨げているということである。こういった状況にある種のニーズだと捉え、今後は、多様な学習方法に触れ、学んだ日本語が実際に通じる経験をし、学ぶ喜びを知ることのできる、豊かな学習の場を作ることを目指していく計画である。

2. 外国人と日本人の交流機会の創出について

成果報告会としてのシンポジウムにおいて、より多くの外国人当事者と一般日本人の参加を促すため、また、地域の日本語教育への理解を広げていくためには、さらに区内の日本語教育や多文化共生に関わる団体との連携を強化・拡大し、日本語学習の場や交流の場を拡張していく必要がある。情報提供、情報共有を様々な方法でできるような体制づくりを検討したい。